「嫌中憎韓」に加担せず 出版界に自主的な動き

于文＝文　呉亦為＝写真

近年、日本の街頭では、韓国や中国に対する排外的なデモが行われ、書店には、中国を非難し、韓国をののしる「嫌中憎韓」の書籍が氾濫している。これが中国や韓国に対する日本の国民感情が悪化する原因の一つとなっている。しかし、こうした本をつくっている出版界から反省の声が起こりはじめ、「ヘイトスピーチと排外主義に加担しない出版関係者の会」が結成された。一部の書店では、店頭に平積みされていた「嫌中憎韓」の書籍を、普通の棚に戻し始めている。こうした現象はまだ始まったばかりだが、なぜ起こり、どう発展してきたのか、そしてどういう意味を持つのか――出版界に詳しい関係者に話し合ってもらった。（文中敬称略）

「憎韓」から「嫌中」へ広がる

司会（横堀克己）　「嫌中憎韓」の動きはいつごろから起こったのでしょうか。その背景と現状についてどう分析しますか。

岩下結　「憎韓」の動きは、「新しい歴史教科書」や『ゴーマニズム宣言』、さらに日韓ワールドカップなどから始まったと思います。

中国に対する嫌悪感はちょっと違って、2000年代のかなり後半からでしょう。中国の経済発展の勢いが無視できない状況となり、日本が明らかに追い抜かれるという意識と、軍事力の強化を日本に対するプレッシャーと感じる人が多くなりました。2012年の「島」の問題以来、この問題がわかりやすい争点になり、「嫌中感情」がさらに拡大し、中国がわかりやすい批判の対象となったのです。

中国に対する「批判の根拠」は、主に中国脅威論です。沖縄の市町村長が東京に来てオスプレイの配備に反対をした時に、私も参加しましたが、その時、沖縄の人たちのデモ隊に向かって「中国の手先」など罵倒する人がいました。

段躍中　私は東京・池袋に住んで10年になりますが、池袋駅北口には中国の店が多くあります。そこにまで「反中デモ」が行われています。出版物に関しては、2010年に中国のGDPが日本を追い越した後、雑誌のタイトルがひどくなったという感じがします。また2012年以降、「島」の問題では、メディアや週刊誌の見出しは刺激的なものが多くなりました。単行本については、この2、3年間に出版されたものをリストにしましたが、タイトルで嫌中をうたって読者を煽っていても、中身は大したものがないというものも多いように思います。

近藤大博　例えば元中国大使の丹羽宇一郎さんが書かれた『中国の大問題』ですが、別に「反中」でも「嫌中」でもないのに、書店ではこれを「嫌中」の本の棚に並べています。真面目な本でもタイトル次第で「嫌中」の本のようになるのが現実です。

また、今のテレビの視聴率は30秒ごとに測定されます。「親中国」の発言が出てくると視聴率が極端に落ち、「反中国」の発言が激烈であればあるほど視聴率が上がります。残念ながら、コメンテーターたちはカメラにこびるような形で、中国を悪しざまに言うような雰囲気がいまだ続いています。

「売らんかな」が先行

司会　出版社が「嫌中憎韓」の書籍を次々に出すのはなぜでしょうか。

岩下　やはり売れるからだと思います。単発の大ヒットは多くなく、昨年のベストセラーランキング20位以内に入ったのは『呆韓論』だけ。しかし、刊行点数が多く一定数は売れる。手堅いジャンルとみなされたために、各社がさまざまなタイトルを付けた「嫌中憎韓」本を出すようになり、エスカレートしてきました。

近藤　冷静に分析している著作でも、「売らんがため」に反中的なタイトルを付けなければならない状況です。

岩下　この現象は特に新書の場合が顕著です。安価で初刷部数が多く、大量に店頭に供給し、広告も一気に出して、平積みにし、一定数売れたらさっと引き下げます。今の出版業界はひとつの本が3年も売れるなどとは期待していません。その時々のブームに乗って、回転の速い商品として出しています。

司会　売れるというのは、大体何部くらいなのですか。

段　新書の場合は初刷大体1万部。本屋に行くと、このような本は平積みにして少なくとも20、30冊があります。版元も、編集者たちも社会の空気を読んで「今の読者はこういうのが好みだから」と「嫌中憎韓」の本を出す。ただ、本当に売れているかどうか、私たちにはわかりません。

岩下　私たちのような小出版社は最初に1000～2000部くらいでスタートして好調な

近藤大博さん

岩下結さん

出席者

近藤大博
雑誌「中央公論」元編集長、元日本大学大学院教授、早稲田大学非常勤講師

岩下　結（ゆう）
大月書店編集部副部長、「ヘイトスピーチと排外主義に加担しない出版関係者の会」の呼びかけ人

真鍋かおる
高文研編集者、「ヘイトスピーチと排外主義に加担しない出版関係者の会」事務局メンバー

段躍中
日本僑報出版社代表
2011年から「日中出版界友好交流会」を主催

横堀克己
司会　本誌編集顧問

日本の書店にはいまだに嫌韓本・嫌中本が平積みされている

ら増刷していく。だが「嫌中憎韓」本はいきなり店頭に大量に並べて、それを見た客は「人気の本だ」と思って買ってしまう。「物量によって売る」というスタイルが確立されているのです。当然、後で返品に苦しめられますが、それを埋めようとさらに新刊を出す。負のスパイラルです。

真鍋かおる　大手の出版社の企画会議では、営業部の意見が非常に強いと聞いています。営業の支持を得られないと編集者は本を作れないという状況にあります。配本部数はその筆者の前の本の売上データや広告の出稿量で決まります。だから、こんな本を作りたいといっても、データがなかったり、売れそうもないと判断されたりすれば手も足も出ません。大手の版元ほど、こういう傾向が強いと思います。

横堀克己・本誌編集顧問

出版界自ら足元見つめる

司会　どうして、売れさえすれば何を書いてもよいという風潮がまん延したのでしょう。

岩下　昔の出版界は志が高く、「良い本を売るのだ」という意識が強かった。私がこの業界に入った頃からは、そんな甘えは許されず「売ってこそ良い本」で、編集者が勝手に良いと思っている自己満足ではダメ。「ちゃんと数字を上げて売ってみろ」という意識が強くなりました。結果的にいい面もあったが、中身が正当かどうかを度外視し、売れそうなものを作る、読者のニーズに合わせた方が勝ちという風潮が続いた結果、嫌韓本・嫌中本のブームとなっています。

しかし対応してはいけないニーズがあると思います。差別感情や排外主義もニーズのひとつという考え方は駄目なのではないでしょうか。

近藤　だいぶ前の出版人には絶対にやってはいけない3S（セックス、スキャンダル、センセーショナリズム）という「禁じ手」がありました。しかし出版不況という背景があり、そこに踏み込んでしまった感がありました。出版側が自らの足元を省みるという点で、今までとは違った新しい動きに見えるのかもしれません。それだけ業界のモラルが失われているということかもしれませんが。

真鍋　河出書房新社は昨年5月、「今、この国を考える　嫌でもなく呆でもなく」という「嫌中憎韓」や『呆韓論』を意識したフェアを実施し、自社の本以外にも他社から出された本も含めて、識者が推薦する書物のフェアをやりました。若い社員が自発的にやって、大きな反響がありました。

「ヘイトスピーチ」について話し合う出版界の関係者たち（左から岩下結さん、真鍋かおるさん、横堀克己・本誌編集顧問、近藤大博さん、段躍中さん）

す。車に例えると、ブレーキの効かない車、ハンドルが効かない車を売ってはいけません。あなたの本はブレーキが効きますか？ハンドルは効きますか？という問いかけをしたい。

司会　出版界の有志の人たちはこうした現象に対し、昨年3月「ヘイトスピーチと排外主義に加担しない出版関係者の会」を立ち上げましたね。

中国の大手書店では日本に関連する書籍が数多く売られているが、反日関連の本は1冊もない

段躍中さん

岩下　まだ本当に微々たる力です。会の趣旨文をネット上にアップした後、出版の仕事に携わる人を中心に700人くらいが賛同して署名してくれました。出版の業界内で、現在の状況に疑問を感じている人がこれだけいると実感できました。

司会　出版界で働く人自身からこうした反省の声が上がったのは初めてでしょう。

岩下　出版側が「ヘイトスピーチ」の加害者の側になっているのではないかという問題意識から出発しました。出版側が自らの足元を省みるという点で、今までとは違った新しい動きに見えるのかもしれません。それだけ業界のモラルが失われているということかもしれませんが。

言論の自由との関連は

司会　「ヘイトスピーチ」を批判することと、言論の自由、出版の自由、表現の自由との関わりはどう考えていますか。

真鍋かおるさん

真鍋　同業者を批判することになるので、非常に難しい問題です。しかし排外主義的なタイトルが書店や電車の中吊り広告で人々の目にさらされることが、社会にどれだけの影響力を与えるかが心配です。

段　「嫌中」の書籍はもちろん、日中関係の悪化につながるので心配です。危機感を持っていますが、私は「出版が出版を制する」という考えです。もっと良い本を出し、良識のある出版社が良心的な読者と手を組み、「右翼的な出版物」に対抗していきたい。言論の自由があるからこそ、発行を禁止するのではなく、真正面からぶつからないといけません。

近藤　しかし北京の王府井の本屋には反日本の本が見当たりませんね。日本の現状を見るに、我々の方がおかしいのではないでしょうか。

岩下　ソウル最大の教保文庫（書店）にも反日本がほとんどないそうです。日本のライトノベルとか漫画などが主流です。日本側だけがなぜこんなに被害感情を持っているのでしょうか。

近藤　中・韓の勃興は日本にとってプラスであることに気付けば、「嫌中憎韓」本は減るのではないかと思いますが……　■